

幼稚園教諭の役割について

— ある幼児への聴きとり調査の分析から —

On Roles of a Kindergarten Teacher :
An Analysis of Oral Interviews with a Infant

古 屋 義 博*
FURUYA Yoshihiro

要約：幼稚園教諭が幼児に対して果たす役割の多様性とその重要性を、幼児への聴きとり調査により検討することが目的である。対象は、おおむね良好な発達水準にある幼稚園3歳児1人である。入園から1学期終了までの16週・全63日間、幼稚園でのエピソードを聴きとった。報告されたエピソード549件を分析した主な結果は次のとおりである。①対象児の担任に関するエピソードが圧倒的に多く、特に年度当初に多い。また、そのエピソードの性質は変化していく。②多く登場する同じクラスの幼児2人が第3-4週に顕著に登場して、その後、一定の割合を維持する。そして、第5週以降は、担任とその2人の幼児が一定の割合を維持しつつ、他の多くの幼児が登場する。これらの結果から、対象児にとっての入園当初の担任との関係構築が、他の幼児たちとの間で形成されていった人間関係構築の土台になったと考察して、担任の果たす役割の多様性とその重要性を指摘した。

キーワード：幼稚園教諭、幼児、人間関係構築の過程、聴きとり調査

1 問題と目的

筆者ら（古屋・鷹野・山中，2002）は社会性やその周辺領域の発達について、学校年度の切り替え時に一時的ではあるが、見かけ上の退行現象が生じることを、知的障害養護学校に在籍する児童を対象にして、継続的な行動観察により明らかにした。そのような退行現象は、学校年度の切り替え時の環境変化により毎年繰り返されることであり、その期間の慎重な取扱いが、特に担任に求められると強調した。

また、筆者（古屋，2004）はおおむね標準的な発達領域あり、入学後の約4週間、登校を断続的に渋った小学校1年生が学校に適応していく過程を、入学から1学期終了までの期間、対象児からの聴きとり調査により明らかにすることを試みた。結果、担任が登場するエピソードが圧倒的に多く、特に第4週までその傾向が顕著であった。しかし、登校を渋らなくなった第5週目以降に担任が登場するエピソードの比率が低下し、他の児童とのかかわりに関するエピソードの比率が上昇した。また、第5週以降、対象児の人間関係の質的な変化を示す異性の児童との関係構築に関して、担任が観察学習の対象になっていた可能性を明らかにした。これらの結果から、入学から第4週まで登校を断続的に渋った対象児が学校に適応していく過程で果たした担任の多様な役割を指摘した。

*障害児教育講座

これらの事例研究（古屋ら，2002；古屋，2004）は，発達や社会適応にかかわり，特別でより個別的な教育的配慮が必要な子どもが対象であった。

そこで，本研究では，特別でより個別的な教育的配慮を特に必要としない幼児を対象に，幼稚園という新しい環境に適応していく過程で担任が果たす役割と，その過程で生じる他の幼児との関係構築の質的变化を聴きとり調査によって明らかにすることを目的とする。

2 方法

(1) 対象

2000年4月生まれ的女子幼児（以下，A児）。幼稚園3歳児。4人きょうだいの第3子。生活年齢49か月時点で津守式乳幼児精神発達検査の結果は，運動60か月，探索60か月，社会60か月，生活習慣48か月，言語72か月であり，おおむね良好な発達水準にある。

幼稚園に入園する前の1年間，別の保育機関に週2-3日，各半日通う。その保育機関で集団適応やその他の行動について大きな問題は特に指摘されていない。

A児が在籍する幼稚園のクラスの規模は，女子幼児6人，男子幼児8人，計14人である。3歳児クラスはこの1クラスのみを設置である。なお，上記の保育機関からこの幼稚園に入園した幼児は1人（以下，男子幼児F）であった。

(2) 期間

A児が幼稚園に入園した2004年4月8日から，1学期終了の同年7月21日までの16週，授業日全80日間である。

(3) 手続き

原則として毎日放課後に，「今日，幼稚園，どうだった。」という質問により，A児から報告されるエピソードを筆者が聴きとる。

聴きとりについて，A児の報告に対して「繰り返すこと」「要約すること」「促すこと」などを中心に行い，A児の感情に付き添う態度（諏訪，1995）を原則とする。報告に文法的な誤りがあった際には，A児の発話意欲の維持を考慮して，その誤りを指摘したり訂正することはせず，正しい文法に修正して返す（竹田・里見，1994）。報告に，その幼稚園固有の名称のついた設備や備品などが含まれ，筆者が理解できなかったときには，事実確認のための最小限の質問を行う。記録については，聴きとりを行いながら筆者が筆記した。

(4) 分析

報告されるエピソードを「人物が登場するエピソード」と「人物が登場しないエピソード」に分類する。「人物が登場するエピソード」については，そこに複数の人物が登場した場合，登場した人物ごとに独立したエピソードとして集計する。担任（以下，報告されたエピソードの引用では「H先生」）に関するエピソードを中心に，質的な分析を行う。

3 結果と考察

(1) 報告されたエピソードの件数について

出席日数74日間（授業日数80日間）の内の63日間について聴きとりを行った。報告さ

れたエピソードの件数は全549件、一日あたりの平均は8.7件、標準偏差は3.6件であった。一日あたりのエピソードの件数の分布を図1に、週ごとの平均値の推移を図2に示す。

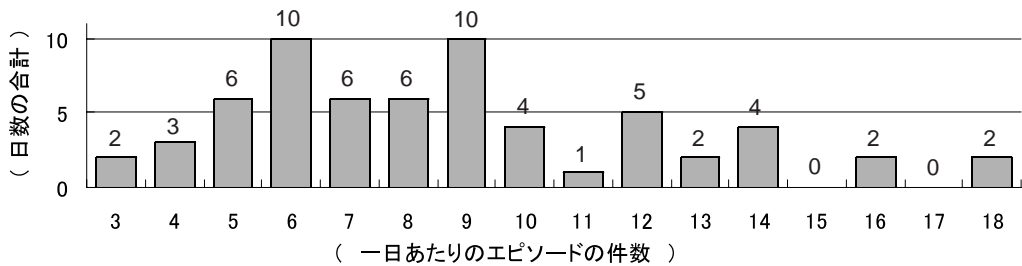


図1 一日あたりのエピソードの件数の分布

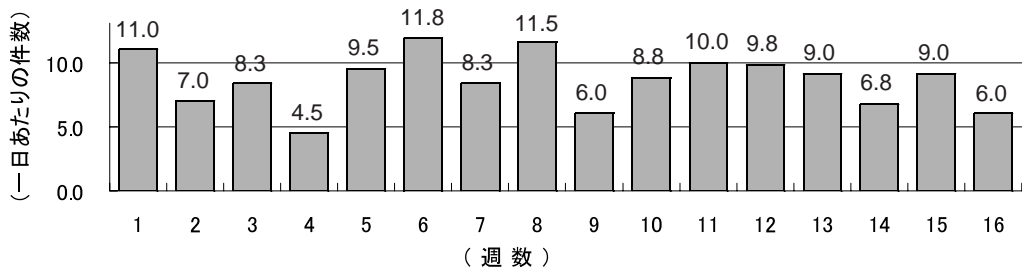


図2 エピソードの週ごとの平均値の推移

報告されたエピソードの件数が最も少なかった全2日間（第4週第1日目と第4週第3日目）の全エピソードを表1に示す。第4週第1日目は他の幼児（以下、女子幼児B）との対立（表1中のアンダーライン部分）、第4週第3日目は寒い思いをしたとの印象（表1中のアンダーライン部分）であり、ともに否定的な意味のエピソードである。先行研究（古屋, 2004）でも、対象の小学校1年生から報告されるエピソードの少なさ、つまり‘口の重さ’と学校でのエピソードの性質とが、強く関連していると指摘したが、A児についても同様である。

一方、報告されたエピソードの件数が最も多かった全2日間（第8週第3日目と第15週第4日目）については、次のとおりである。第8週第3日目については、親子で参加する遠足があり、報告したいエピソードが必然的に多かったようである。第15週第4日目については、クラスの友達や担任以外の教職員のそれぞれの動向が詳しく報告されたため結果的に件数が多くなった。

表1 報告件数が最も少なかった全2日間（第4週第1日目・第4週第3日目）の全エピソード

第4週第1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレでH先生、まけちゃったんだよ。こうやって、こうやって、こうやって……（※とトイレで用を済ませるマイム） ・おべんとう、ぜんぶ食べた。おべんとおべんとううれしいな……（※と歌をうたう） ・○○ちゃん（※女子幼児B）が泣いた。○○（※A児）が悪かった。○○（※A児）が先に遊んでたら、○○ちゃん（※女子幼児B）が、一緒にあそぼ、って言ったけど、違うことしたから。
第4週第3日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼんぼん（※内科健診）やった。恥ずかしかった。寒かった。 ・○○（※おやつ名称）、H先生からもらった。 ・ごはん、ぜんぶ食べた。

(2) 「人物が登場するエピソード」と「人物が登場しないエピソード」との比率

「人物が登場するエピソード」と「人物が登場しないエピソード」の件数とその比率の推移を図3に示す。

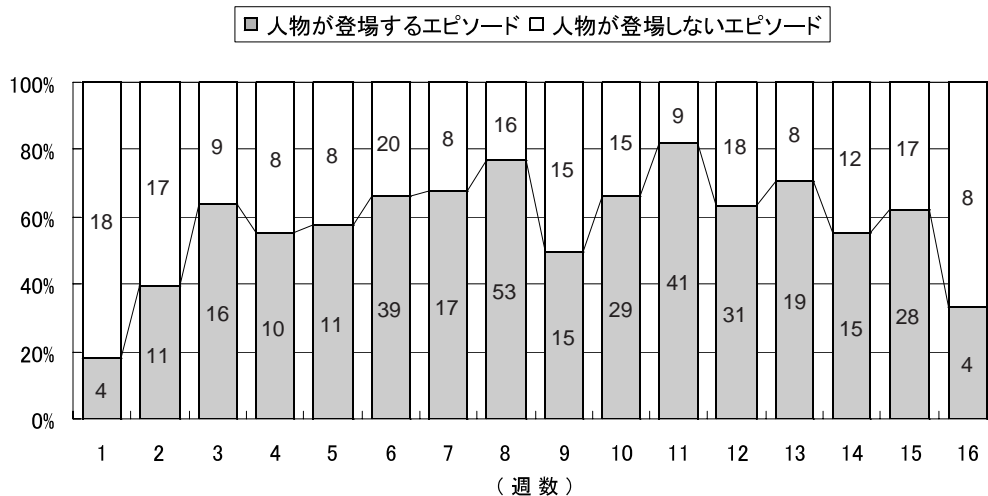


図3 「人物が登場するエピソード」と「人物が登場しないエピソード」の件数とその比率の推移

第1週は、入園間もないときであり、「人物が登場しないエピソード」が8割強を占めている。第1-3週の期間を経て、「人物が登場するエピソード」と「人物が登場しないエピソード」の比率が逆転する。その後、多少の変動はあるものの、「人物が登場するエピソード」の方が多い状況が維持されている。

これら結果は、入園間もなく比較的速やかに、A児のまなざしがさまざまな人物へと移行していったことを示している。そして、このことは、人間関係構築の状況を象徴していると考えられる。

(3) 各人物の登場件数について

「人物が登場するエピソード」について、「教職員」「同じクラス的女子幼児」「同じクラスの男子幼児」「他の学年の幼児」ごとにその件数を集計した結果を表2に示す。

表2 各人物の登場件数とその割合

	件数	割合(%)
教職員	109	31.8
内訳		
担任(H先生)	69	20.1
その他の教職員	40	11.7
同じクラス的女子幼児	104	30.3
内訳		
女子幼児B	47	13.7
" C	25	7.3
" D	16	4.7
" E	8	2.3
" F	8	2.3
同じクラスの男子幼児	108	31.5
内訳		
男子幼児A	18	5.2
" B	17	5.0
" C	16	4.7
" D	13	3.8
" E	13	3.8
" F	11	3.2
" G	11	3.2
" H	9	2.6
他の学年の幼児	22	6.4
合計	343	100.0

「他の学年の幼児」に関するエピソードは極めて少なく(22件)、「教職員」「同じクラス的女子幼児」「同じクラスの男子幼児」がそれぞれ約3割ずつを占めている。「教職員」に関するエピソード全109件の内、担任に関するエピソードは69件である。これらの結果から、A児のまなざしは、このクラスへと強く向けられていたことが言える。

各人物ごとに着目すると、次のようなことが言える。

担任(69件)が群を抜いて多い。この結果は、担任へのA児のまなざしの強さを示している。

登場する幼児については、大きな偏りがある。女子幼児B(47件)と同C(25件)とが群を抜いて多い。報告されるエピソードの件数の偏りについて、特に同性の幼児でその傾向が強い。最も多く登場する女子幼児B(47件)と最も少なかった女子幼児E(8件)や同F(8件)との隔たりは約6倍である。一方、異性の幼児は比較的広く浅く登場していて、最大(18件)と最小(9件)の隔たりは2倍にとどまっている。

(4) クラス内の各人物の登場件数の推移について

「人物が登場するエピソード」の中から登場するクラス内の人物として、「担任」「女子幼児Bと同C」「他の幼児」を抜き出して、それらの件数（割合）の推移を図4に示す。

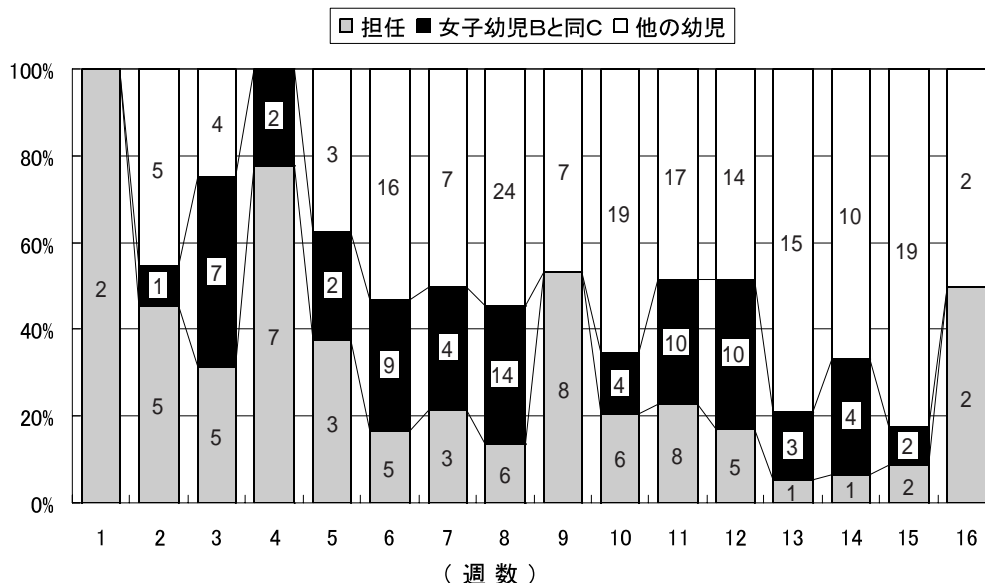


図4 「人物が登場するエピソード」の件数（割合）の推移

入園間もない第1-2週は、「担任」が多く、そして不特定多数の幼児が登場する。第3週に「女子幼児Bと同C」の比率が高まり、その後、多少の変動があるものの、第12週まで同じような比率を維持する。そして、第13週以降、「担任」および「女子幼児Bと同C」の比率が下がり、「他の幼児」の比率が高くなる。

これらの結果は、担任から特定の同性の幼児（女子幼児Bと同C）へ、そしてその他の多くの幼児へとA児のまなざしが広がっていったことを示している。そして、このことは、人間関係構築の過程を象徴していると考えられる。

(5) 担任が登場するエピソードについて

担任が登場するエピソードを、「A児と担任との個別的なやりとり」「他の幼児に対する担任の叱責や注意」「その他」の3つの性質ごとに分類して、それらの件数（割合）の推移を図5に示す。入園間もない第1-3週の期間で担任が登場したエピソードのすべてを表3に示す。

第2-5週の期間、「A児と担任との個別的なやりとり」が相対的に多く、担任へのまなざしの強さを示している。このことは、そのようなやりとりがA児にとって、とても重要な体験であったことを象徴していると考えられる。

「他の幼児に対する担任の叱責や注意（表3中のアンダーライン部分）」は、第2、3、10、14週に報告されている。先行研究（同、2004）で検討した第4週まで登校を断続的に渋った小学校1年生の場合、比較的良好な適応となった第5週以降に、その対象児のフラ

ストレーション状態を担任が察して代弁するエピソード（表3中の第3週第1日目のエピソードがそれに類似）や担任の叱り方を観察したというエピソード（表4中の第2週第2日目のエピソードがそれに類似）をより多く報告した。その時期を経て、さまざまな児童との関係を示すエピソードを報告するようになった。

このように、担任が登場するエピソードの性質の変化と人間関係形成の過程との関係は、先行研究（同、2004）の小学校1年生とA児とで類似した傾向があったと言える。

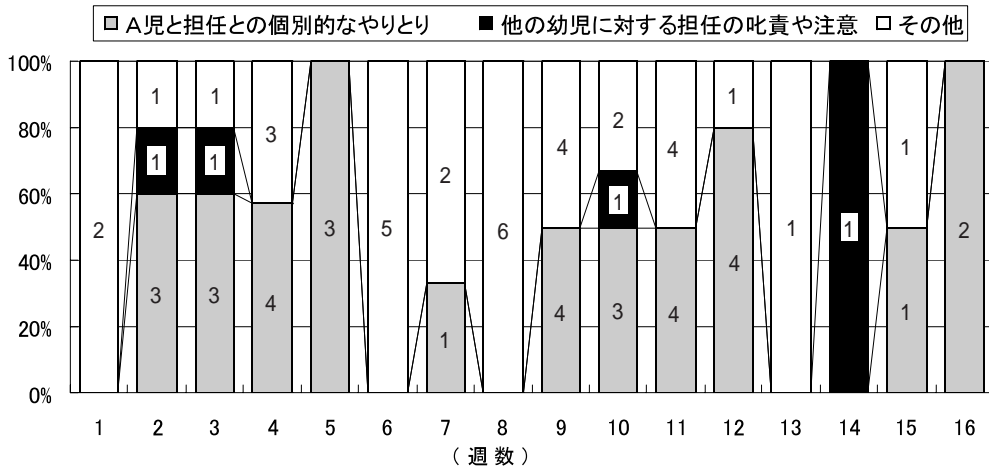


図5 担任が登場するエピソードの性質別の推移

表3 第1-3週における担任が登場するすべてのエピソード

第1週第1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生の名前，H先生，H先生。 ・ 上（※建物2階の部屋）で，まねっこした。H先生のまねした
第2週第1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生のうた，H先生のうた，おしえてあげる。せんせい……（※と歌をうたう） ・ <u>〇〇くん（※男子幼児D）がうわばきで外に出た。H先生がおこった。</u>
第2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 〇〇ちゃん（※アニメキャラクターのハンコ）をH先生がつけてくれた。
第4日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ H先生がボタンはずしてくれた。
第5日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食のとき先生にスープもらった。で，〇〇（※A児）がいっぱい食べた。
第3週第1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>ほっぺにベンされた。知らない男の子に。〇〇ちゃん（※女子幼児B）がH先生に言った。先生がおこった。</u>
第2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今日がんばりすぎたからハンコ2つもらった。H先生から。 ・ ばんそこ，はってもらった。H先生に。 ・ H先生，〇〇（※あるアニメ番組に関するもの）好きなんだよ。 ・ 〇〇（※A児），H先生をてんてい，って言うの。〇〇（※A児）と〇〇ちゃん（※女子幼児C）。

4 まとめと今後の課題

幼稚園入園からの16週にわたり、一人の幼児から聴きとった幼稚園でのエピソードをもとに、その幼児の他者へのまなざしの変化、そしてそれが象徴する人間関係構築の過程について明らかにすることを試みた。

先行研究（古屋，2004）と同じように、報告されたエピソードの件数や性質から担任の果たした役割の多様性とその重要性を記述した。先行研究（同，2004）との共通点は次のとおりである。

第一に、入園間もない時期は、担任が多く登場して、その後、同性の特定の幼児が多く登場するようになる。次いで、他の幼児に対する担任の叱責や注意などのエピソードが報告されるようになった後から、他の幼児に関する報告が増加する。対象児のまなざしの変化が象徴する人間関係構築のおおまかな傾向として、担任から同性の特定の幼児へ、そしてその他の多くの幼児へと広がっていった。入園間もない幼児にとって、その後の人間関係の広がりスタートは担任との関係構築であり、担任の役割の重要性を確認できる。

第二に、否定的な意味のエピソードが報告される日には、報告されるエピソードの総数は少なくなる。すなわち、‘口が重い’状況となる。よって、報告されるエピソードの性質の分析も重要であるが、その件数そのものが直接的に対象児の心理的な状態を表現する。

クラスの中の子ども集団の関係性は、学校年度の切り替えや年度中のさまざまなエピソードにより常に揺れ動いている。その各場面に応じた役割を教師は果たしていく。子どもから報告されるエピソードから、教師の役割を読む解くことにより、その多様性とその重要性がより鮮明になっていくのではないかと考えられる。

文献

- 1) 古屋義博・鷹野美香・山中淳子（2002）ある一人の知的障害児の社会性発達の過程と教師による関与との関係－知的障害養護学校の自由遊び場面における自然的観察－。山梨大学教育人間科学部紀要，3(2)，227-234.
- 2) 古屋義博（2004）ある一人の小学校新1年生が学校に適応していく過程－聴きとり調査の分析から－。教育実践学研究，9，13-22.
- 3) 諏訪茂樹（1995）援助者のためのコミュニケーションと人間関係 [第2版]。建帛社.
- 4) 竹田契一・里見恵子（1994）インリアル・アプローチ。日本文化科学社.